

子どもとのかかわりを通した学生の学び

— こども学フィールドワークⅡ実習ノートの分析を通して —

増田 吹子

A Study on What Students Learn through the Interaction with Children
Through Analysis of Data from “Children’s studies; Field Work Ⅱ”

Fukiko Masuda

現在、保育者養成校で学んでいる学生達は核家族化・少子化が進行した社会で育っており、その多くは子どもや保護者とのかかわりの経験が少ないと考えられる。そのため、養成校における実習は、保育者として必要な知識・技能・資質等を子どもとのかかわりを通して身に付ける貴重な機会となっている。本稿では、フィールドワークⅡの授業の一環として行われる純心こども講座の実習ノートの分析を通して、そのような学生たちが子どもとかかわる経験を通して得られる学びを検証し、また学生がより効果的に学べるようにするための指導について考察する。

Key Words: 「子どもとのかかわり」「実習ノートの分析」「効果的な指導」

(Received September 24, 2013)

1. はじめに

(1) 研究目的

近年の保育者養成が、少子化・核家族化といった社会の変化に対応できる保育者を育成するという使命を帯びているのは勿論である。しかし、その一方で保育者を目指す学生達自身が少子化・核家族化が進行した社会の中で成長期を過ごしており、そのために多様な体験の機会を逃したまま入学し、保育者を目指そうとしているという問題を孕んでいる。具体的には、兄弟数の減少により未就学児とかかわる機会がない、核家族化や地域社会のつながりの希薄化により自分の親や教師以外の大人とかかわる経験をしてきていない、少子化により小規模な仲間集団の中で育ち社会的発達の機会を逃している、等が考えられる。

そこで、本学の生活学科こども学専攻では「こども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」という科目において学内実習・学外実習の機会を設けることで、保育者を目指す学生が子どもや保護者と直接かかわる経験ができるようにしている。

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

「こども学フィールドワークⅠ」では、子ども達のありのままの姿を観察・記録・考察することや幼稚園・保育園の園長等の話を聞くことで子ども観を拓げることをねらいとし、チャイルドウォッチングと外部講師の講話を行っている。

「こども学フィールドワークⅡ」では、学生が実際に子どもや保護者と直接かかわる機会をもつことで子どもの豊かな育ちを支援するために必要な視点や技術について主体的に学ぶことを目的とし、学外実習（ボランティア）と学内実習（純心こども講座）を行っている。

本稿では、筆者が担当しているこども学フィールドワークⅡの学内実習である純心こども講座における学生の記録の分析を手掛かりに、学生が子どもとかかわることが「子どもの豊かな育ちを支援するために必要な視点や技術について主体的に学ぶ」ことにつながっているのかということについて検証し、より効果的に学べるための指導について考察する。

(2) こども学フィールドワークⅡ（学内実習）の概要¹⁾

こども学フィールドワークⅡでは本学の江角学びの交流センターの事業の一環として開かれる「純心こども講座」に、学生が指導補助員としてかわり、子どもや保護者と直接触れ合う機会を設けている。

①目的

実習の場である「純心こども講座」を実施するにあたって必要な「企画・運営・反省」の流れを経験し、「企画を実現する力」「子どもやその親と関わる力」「講座の内容を振り返り、改善していく力」を育てることを目的としている。

②こども学フィールドワークⅡの流れ

- 1) 全体でのオリエンテーション、グループ・担当講座決定
- 2) 講座の内容を考える→企画書作成・提出
- 3) 講座の準備をする→運営計画書作成・提出
- 4) 講座の運営をする
- 5) 実施後の反省を行う→反省会・実習ノート提出
- 6) 全体での報告会

③純心こども講座の進め方

純心こども講座には「いろとあそぼう・かたちとあそぼう（定員20組）」「リズムあそび（定員50組）」の2種類がある。「いろとあそぼう・かたちとあそぼう」を1Aクラス（41名）、「リズム遊び」を1Bクラス（40名）が担当する。各講座は4回実施され、学生は4回ある講座のうちの2回を担当する。参加する子どもは事前に4回分の申し込みをしているため、学生は同じ子どもと2回ずつかかわることになる。

④昨年度までとの違い

昨年度までは、4回の講座を担当するクラスの学生全員で行っていた。今年度は1年生が81名

と昨年までより増えたため、クラスを2グループに分け2回ずつ担当する形をとった。これは、1回の講座に40名前後の学生がかかわる場合、役割を見つけられない、子どもとかかわる機会が十分にもてない等の懸念があったためである。今年度は20名程度で2回の講座を担当することとした。

2. 研究方法

学生の子どもとのかかわりの中から学ぶことを知るために、KJ法を参考にして講座実施後に学生が記入し提出する実習ノートの分析を行った²⁾。

具体的には、講座後に記入する「講座についてのふりかえり」シートの中から、学生が子どもとのかかわりの中で感じたことや考えたことを記してある部分を抜粋し、後から文章全体を確認できるよう出席番号とともに付箋に書き出し、類似したものをグループ化する作業を行った。1回目の講座終了後と2回目の講座終了後の違いを比較することで、子どもとのかかわりの経験を重ねることで、学びに変化が生じるかという点を分析した。

「講座についてのふりかえり」シートには、「自分の課題・目標」「今回の講座への取り組みについての自己評価」「講座に参加して」の3つの項目について記入する。「自分の課題・目標」には、講座の前に自分で考えた課題や目標を記入する欄と「課題・目標についての振り返り」を記述する欄がある。このシートの中で講座の前に記入するのは、この課題・目標の部分だけである。今回は、講座を通して何を学ぶかを分析するため、講座前に記入する課題・目標については分析の対象外とした。「今回の講座への取り組みについての自己評価」には、100点満点で点数をつけて記入する欄と「よかったところ」「改善すべきところ」について記述する欄がある。「講座に参加して」には、感想等を自由に記述する欄と「次回、今後の課題」について記述する欄がある。このように、「講座についてのふりかえりシート」は、子どもとのかかわりを通して何を学べたか、ということを問うようにはなっていない。その中で、あえて子どもとのかかわりに関する事柄についての記述があれば、それは学生の内側から出てくる本音に近いものであると考えられる。

なお、2グループのうち1グループはまだ1回しか講座を終えていないため、今回は2回の講座を終えたグループ（21名）のノートを分析の対象とした。このグループの学生は下記の2回の講座を行った。

・平成25年5月18日（土）10：30～11：30

参加者：0歳～8歳の子ども、34名

テーマ：動物園

内容：学生があらかじめ作った動物の顔の形のお面に、子ども達が好きなスタンプを押してお面を完成させ、動物園をイメージして設営した会場の中で写真を撮る。

・平成25年7月13日（土）10：30～11：30

参加者：0歳～8歳の子ども、26名

テーマ：おばけやしき

内容：目と口のところに穴をあけたビニール袋に、学生が色画用紙で作っておいたりボンや星などを貼る。完成したらビニール袋をかぶっておばけになり、皆で「おばけなんてないさ」を歌う。歌の途中でおばけに扮した学生が登場する。

3. 結果

1回目の講座後の記録から59件、2回目の講座後の記録から58件抽出した。抽出したものをグループ化した結果、5つのカテゴリーに分類できた。それぞれに「反省・課題の発見」「実施前の不安」「楽しさ・喜び」「かかわりにおける満足感」「子ども観の芽生え」という見出しをつけ、内容を分析した。

(1) 学生の記述の分類

学生の記述を分類した結果、次の5グループにまとめた。講座においてできなかったと感じていること、次回の講座や実習等でできるようにしたいと感じていることについての記述を「反省・課題の発見」、講座の実施前に感じていた不安についての記述を「実施前の不安」、子どもが楽しんでいたことや喜んでいたり、自分が楽しかったことや嬉しかったことについての記述を「楽しさ・喜び」、子どもとかかわることができたことについての記述を「かかわりにおける満足感」、子どもに対する印象にかかわる記述を「子ども観の芽生え」とした。分類の結果を下記の表に示す。

	反省・課題の 発見	実施前の不安	楽しさ・喜び	かかわりに おける満足感	子ども観の 芽生え
1回目終了後	26	2	14	7	10
2回目終了後	22	0	16	17	3

各回終了後における学生の記述は以下の通りである。(誤字・脱字は訂正して記述した。)

○1回目終了後

<反省・課題の発見>

- ・最初ひるんだ。何もできず悔しい。
- ・子どもの要望に応えるのに時間がかかった。
- ・子ども達の年齢に対応した接し方ができずに遠慮してしまった。
- ・最初子ども達と触れ合うことに苦戦してしまった。
- ・最初に子ども達が来た時に、うまく接してあげられなかった。
- ・特定の子どもにつきっきりになってしまった。
- ・積極的に子ども達と触れあうことがあまりできなかった。
- ・最初は一人の子どもに対して、皆でかかわってしまい、子どもを驚かせてしまった。
- ・全員とはかかわることができなかったのは反省したい。

- ・一人の子どもにつきっきりになっていた。
- ・親と一緒にいたがっていた子どもに近づきにくかった。
- ・人見知りの子が全くなつてくれなくて、接し方がわからなかった。
- ・何も話さない子もいて、何をしたいのか、どう次の作業に促せばいいのかも困った。
- ・子どもへの接し方もあまり積極的じゃなかったのも、もっと子どもが親しみやすくなるよう努力したい。
- ・次回からはもっと良い講座になるように頑張りたい。そして、もっともっと子どもたちの笑顔をこれからたくさん見ていきたい。
- ・コミュニケーションの取り方、接し方に注目して、次回の講座では改善し、たくさんの子とも達と触れ合いたい。
- ・次の講座では、もっとたくさんの子ともと触れ合いたい。
- ・子ども達ももっとよこんでくれるような工夫ができればいい。
- ・改めて子どもを好きになることができ、「もっと喜んでほしい」と思った。
- ・もっと積極的に多くの子ども達に声掛けができるようにする。
- ・関わり方を工夫して人見知りの子ともも楽しめるようにする。
- ・子どもの様子を見ながら講座を楽しめるように導く。
- ・子どもを楽しませることは大変
- ・子どもの視線まで姿勢を下げ、笑顔で話しかけることが大事だと感じた。
- ・相手が子どもなので、本当にちょっとしたことに気を配らなければならないと感じた。
- ・様々な子ども達（人見知りが激しい子、活発に走りまわっている子、大人しい子など）がいて、それぞれの性格に合わせて接するのが大変だった。

<実施前の不安>

- ・最初は不安でいっぱいだった。
- ・子どもが喜んでくれるか不安だった。

<楽しさ・喜び>

- ・一緒に手遊びやお面づくりができた。楽しむことができた。
- ・会場の設営物などの興味をもって遊んでいた子ども達がいた。
- ・楽しく遊べていた。
- ・子どもと一緒にになって楽しめた。
- ・思っていた以上に子どもたちが喜んでいたので嬉しかった。
- ・子ども達が楽しんでくれた。
- ・子ども達の笑顔を見て一気に引き込まれた。
- ・装飾や参加賞を喜んでくれた。
- ・作ったものを全部持って帰ってくれて、本当に嬉しかった。
- ・子どもたちが私たちの作った壁面をすべて持って帰ってくれたのがとても嬉しかった。
- ・壁面など子ども達が喜んでくれてよかった。

- ・(お土産のメダルを) 好き嫌いなくもらってくれたので、自分自身とても嬉しかった。
- ・設営物の文字まで持って帰ってくれたのは嬉しかった。
- ・設営物など、きれいに持って帰ってくれて、喜んでお面をかぶってくれた。

<かかわりにおける満足感>

- ・時間がたつと慣れて触れ合えた。
- ・1人の子ともと最初は全然仲良くなれなかったけれど、最後はとても仲良くなれて良かった。
- ・後からは、ばらばらになってたくさんの子と触れ合えた。
- ・子どもたちの笑顔を見たら私も自然と笑顔になり、多くの子ども達とたくさん関わることができた。
- ・積極的にかかわることはできた。
- ・不安を感じながらだったが、実際に子ども達を前にすると勝手に体が動いていた。
- ・いろいろな子どもとかかわれてよかった。

<子ども観の芽生え>

- ・5ヶ月の子ともと触れ合うことができた。意外と大きくてびっくりした。
- ・2歳の子ともと触れ合えたが、その子も自分のイメージの年齢より大きく感じられた。
- ・ぞうさんを破ったりピアノを弾き始めたりと思ってもない行動をしていた。
- ・子どもたちの想像力はすごいと思ったし、子ども達は私達が思っている以上の力をもっていると思った。
- ・自分なりに色をつけている姿を見て感心した。
- ・子どもは可愛くて、色んな子がいてすごく楽しかった。
- ・子ども達には、あふれんばかりのパワーがあって、負けないように頑張ろうと思った。
- ・子ども達の可愛い一面を見ることができた。
- ・自然な姿の子ともと触れ合って良かった。
- ・授業では学べない子どものありのままの姿をみることができた。

○2回目の講座終了後

<反省・課題の発見>

- ・写真を撮る時の言葉掛けが足りない。(撮影係の学生)
- ・たくさんの子ともとは触れ合えなかった。
- ・子ども目線で考えることができなかった。
- ・子どもたちに「いたずらおばけ」の面白さや楽しさを伝えきれていない。(絵本の読み聞かせを担当した学生)
- ・もう少し子どもがどうしたら楽しむかを深く考えるべきだと感じた。
- ・走る子がいて、周りの子や小さい子の安全のため静かな遊びを促すべきだったのに臨機応変に対応できていなかった。
- ・少し元気に圧倒されてしまった。

- ・一緒にいた子どもが少し乱暴な行動をとるようになった。注意をしたが聞き入れてくれなかった。私の注意の仕方がダメだったのだと思った。
- ・子ども達の気を引いたり、安全面に注意することが少し足りなかった。
- ・走り回っていてヒヤヒヤした。安全面をこれから考えていかなければと思った。
- ・作り終わってから不機嫌になってしまっていたので、その対応に困ってしまった。
- ・もっと安全面に気を配り遊び道具を作っていれば頭をぶつけたりしなかったのかなと思った。
- ・単純な作業だったため、子ども達が作業の途中で飽きてしまった。
- ・講座の内容が簡単すぎた気がしたので、もっと子どもに何かさせてあげられるように工夫していきたい。
- ・声かけが大切だと改めて感じた。
- ・安全面やこれをするとうなると予測する力を、これからつけていかないといけない。
- ・もっと子どもの目線に立って、子どもが全力で楽しんでくれるような活動内容が考えられたらいいと思った。
- ・前に立って堂々と話せて、子ども達をしっかりと動かせるようにならなければならないと思った。
- ・実習などではもっと子どもの興味を引くような工夫をしていきたい。
- ・子どもとかかわる時には声掛けや把握を今回よりもできるようになりたい。
- ・子ども達も怖がっていて、雰囲気を作れていたのがよかった。
- ・子どもたちが喜んだと思ったのがBGMだった。最初に入ってきて、楽しい気持ちになったと思う。

<楽しさ・喜び>

- ・子ども達はすごく楽しんでくれていた。
- ・子ども達も私達も楽しく活動できた。
- ・慣れてきて子どもと楽しく活動に参加できた。
- ・一緒に思いっきり楽しむことができて本当に良かった。
- ・子ども達も楽しそうに笑顔で活動してくれて一緒に楽しむことができた。
- ・楽しんでもらえていたと思った。
- ・笑顔が少なく反応が薄かった子どもが徐々に笑顔になって嬉しかった。
- ・大変な部分もたくさんあったけど、子ども達に喜んでもらえてとても嬉しかった。
- ・(自分達で作った) トンネルを子どもたちが楽しそうにくぐってくれて良かった。
- ・子ども達の笑顔を見ることができて良かった。
- ・子ども達も私達の名前や顔を覚えてくれて嬉しかった。
- ・(子どもの成長に) 気づけたことが嬉しかった。
- ・子どもが壁面をもって帰ってくれて嬉しい。
- ・子ども達に(お土産の) 風鈴を手渡した時、とても喜んでくれたので本当に嬉しかった。涙が出そうになった。

- ・(風鈴を)子ども達に渡すと、音も鳴るので嬉しそうな顔をしていて作ってよかったと本当に思った。
- ・壁面の飾りも持って帰って保育園に持って行くと言ってくれた子がいて、すごく嬉しかった。

<かかわりにおける満足感>

- ・子ども達に積極的に話しかけることができた。
- ・今回は子ども達ともたくさん関わることができた。
- ・子どもの年齢に合わせて袋の大きさをかえたりできた。
- ・なるべく一回目の講座でかかわれなかった子と一緒に活動したが、人見知りなどせず受け入れてくれた。
- ・前回よりさまざまな年齢の子と触れ合うことができた。
- ・様子を見ながらその子の性格に合った接し方ができた。
- ・一人一人がたくさんの子ども達とかかわっていた。
- ・子ども達とも前以上にたくさん関わることができ…
- ・子どもの名前も少し覚えていた。
- ・名前を憶えていて最初から積極的に話すことやかかわることができた。
- ・前回より子どもに積極的に声をかけたり接したりすることができた。
- ・たくさん自分から話しかけたりして積極的にかかわることができた。
- ・子ども達に少し慣れ、笑顔で接することができた。
- ・前回よりも皆が子ども達と積極的に触れ合っていた。
- ・学生がいない子どものところへ積極的に向かうことができた。
- ・自分なりに精一杯子どもと接することができた。
- ・前回の講座に比べて、積極的にかかわって講座を楽しむことができた。

<子ども観の芽生え>

- ・子どもの表情や動きを直接見ることができたので貴重な体験になり、子どもは本当にかわいいと改めて思った。
- ・活動中に袋を被る(ビニールが顔に当たる)ことが嫌な子が多く感じられた。
- ・前回参加してくれた子もいて、この短い期間だったのに前より早くなじめて成長を感じることができた。

(2) 結果の分析

①反省・課題の発見

このグループは1回目は26件、2回目は22件抽出できた。若干ではあるが抽出件数が減少した理由として、2回目は子どもとのかかわりに関しては満足感が大きくなったため、課題の内容が講座の運営や準備(係の仕事に意欲的に取り組めたか、協力して準備ができたか等)についてのことになっていたことが考えられる。

またその内容は、1回目が子どもとかかわれなかったことについての反省が多いのに対し、2

回目は「講座の内容が簡単すぎた気がしたので、もっと子どもに何かさせてあげられるように工夫していきたい」等の活動内容の不十分さや安全面・環境への配慮の不十分さについての反省が多くなっている。後述する「かかわりにおける満足感」に関する記述が1回目より2回目の方が多くなっていることから、回数を重ねることで子どもとのかかわりがスムーズになり、そのことによりかかわり以外の部分にも目を向けられるようになっていることが考えられる。つまり、学生にとって子どもとかかわれるということが最初の乗り越えるべき課題であり、それをクリアして初めて活動内容・安全・環境等の配慮への気づきというステップに進めると考えられる。

②実施前の不安

このグループは、1回目は2件あったが、2回目は0になった。「最初は不安でいっぱいだった」と記述した学生は「子ども達の笑顔を見たら私も自然と笑顔になり、多くの子ども達とたくさん関わることができた」とも書いている。また、「子どもが喜んでくれるか不安だった」と記述した学生は「装飾や参加賞を喜んでくれた」とも書いている。これらから、子どもとかかわる楽しさを感じたり子どもが喜ぶ様子を間近で見たりするという経験をしたことで不安が解消されたと考えられる。

③楽しさ、喜び

1回目終了後は14件、2回目終了後は16件抽出した。抽出件数の増加は大きくないが、その内容には変化が見て取れる。

例えば、1回目終了後には「装飾や参加賞を喜んでくれた」といった自分達で作ったものを子どもが喜んでくれたという喜びに関する記述が7件だったのに対して、2回目終了後は同様の記述は4件に減っている。その分、「一緒に思いっきり楽しめて本当に良かった」等の子どもと共に活動を楽しめたことに関する記述が増えている。また、1回目終了後には「楽しく遊べていた」、「思った以上に子どもが喜んでくれて嬉しかった」等の、単に楽しそうな子どもの姿を見て自分も嬉しいということに関する記述がほとんどであるが、2回目終了後には「(子どもの成長に) 気づけたことも嬉しかった」「笑顔が少なく反応が薄かった子どもが徐々に笑顔になってうれしかった」等、子どもの成長に気づける自分の成長や自分のかかわりが子どもに変化をもたらしたことが楽しさ・喜びの起因となっており、単に子どもと一緒にいることを楽しんだり喜んだりしているのではなくなっていることがわかる。

④かかわりにおける満足感

このグループは、1回目終了後と2回目終了後の差が最も顕著で、7件から17件に増加している。

中でも、1回目終了後には1件にしか見られない「積極的」という言葉が、2回目終了後には7件見られる。1回目の講座を経験し、子どもとかかわることに慣れ、子どもと学生がお互いに顔見知りになったことで緊張感が解けたとともに、「接し方がわからなかった」、「積極的に子ども達と触れあうことがあまりできなかった」等の1回目の反省を踏まえ、各自が積極的にかかわろうとしたのであろう。その結果、自分だけでなく「みんなが子ども達と積極的に触れ合っ

ていた」という記述に見られるように、全体的に積極的な雰囲気ができたものと思われる。また、1回目に子ども達とかかわれない学生の様子を見た筆者が、1回目と2回目の間の授業の中で、子どもには自分からかかわるようにすることや最初は親しくなれなくても傍にいた時間をもつこと等をアドバイスしたこともあり、より積極的にかかわろうと心掛けた学生もいたのではないだろうか。

また、2回目終了後には「子どもの年齢に合わせて」、「なるべく1回目の講座でかかわれなかった子と一緒に活動しました」、「様子を見ながらその子の性格に合った接し方ができた」、「学生がいない子どものところへ積極的に向かうことができた」等、子どもとかかわれたということだけでなく、かかわり方に関する言及が見られる。経験を積むことで、単に子どもとかかわるだけでなく、どうかかわるかということを考えられるようになっている。

⑤子ども観の芽生え

このグループは1回目終了後は9件、2回目終了後は3件抽出した。1回目の講座の際は、子どもとかかわること自体が久しぶりか初めてに近い学生が多かったのではないだろうか。そのため、子どもの姿を実際に見ることで、「自分のイメージの年齢より大きく感じられた」、「思ってもない行動をしていた」等の驚きや発見があり、それが記述につながったのではないかと考えられる。一方、2回目の講座では、一度かかわったことのある子ども達に活動を提供するため企画段階で具体的に子どもの姿を予想しており、子どもの姿を見ての驚きや発見は1回目に比べると少なく、敢えて記述するには至らなかったと考えられる。

4. 考察

これまで、学生の実習ノートの記述から子どもとかかわりの中で学生が感じたことや考えたことを概観してきた。1回目の講座終了後と2回目の講座終了後の記述を比較することで、子どもとかかわれるようになることが環境等への配慮への気づきに先行すること、子どもとかかわることで楽しさや喜びを感じることができれば不安がなくなること、子どもとかかわる喜びの質は変化すること、子どもとかかわる経験を積むことで子どもとかかわりの内容を考えられるようになること等がわかった。これらを元に、この授業のねらいの一つである「子どもの豊かな育ちを支援するために必要な視点や技術について主体的に学ぶ」ことができているか、また、より学生の学びを深めるためにはどんな指導が考えられるかということについて考察する。

子どもの育ちを支援するために必要な視点や技術として、実習ノートの授業の目的において「企画を実現する力」「子どもやその親と関わる力」「講座の内容を振り返り、改善していく力」の3点を挙げ、学生に提示している。

1回目より2回目の講座において、子どもとかかわりについての反省が少なく、逆に満足感は大きくなっており、さらに単に積極的にかわれるようになっただけでなくかわり方を考えられるようになっている。このことから、「子どもやその親と関わる力」は子どもとかかわりを通して身に付けることができていると考えられる。また、「講座の内容を振り返り、改

善していく力」については、「講座の内容」に限定すると子どもとのかかわりに関する記述の分析からは明らかにできない。しかし、少なくとも1回目より2回目の方が子どもとのかかわり方については改善されていることから「改善していく力」は身に付けられていると考えられるのではないだろうか。

子どもとかかわる経験を多く積むことで当然学びが深められると考えられるが、講座の回数はカリキュラムや学生数に左右されるため、単純に回数を増やすことは容易ではない。現実的に可能な範囲で学生の学びを深めるためには、次のようなことが考えられる。

まず、子どもとかかわるようになることが環境等へ配慮への気づきに先行することから、1回目の講座で子どもにかかわれるようになること、2回目の講座で配慮への気づきを得ることをねらいとしてもった上で指導にあたることである。具体的には、1回目と2回目の間の授業で行った子どもへのかかわり方のアドバイスのような指導を、1回目の講座の前に意図的に行うことが考えられる。

また、2回目の講座の後に子どもとのかかわりにおける課題に関する記述が少なくなっている。このため、講座後に子どもとのかかわり方を敢えて考えさせる機会をもつことにより、実習やボランティア等で次に子どもとかかわる機会をもつ際に、よりかかわり方を考えるような指導を行う必要があると考えられる。

5. おわりに

今年度は各学生が参加する純心こども講座が昨年の4回から2回に減ったため、学びが浅くなるという懸念があった。しかしながら、その中でも学生の学びに深まりが感じられ、授業のねらいを達成できた部分もあり、2回の講座でも子どもとのかかわりの中から保育者として必要な知識・技術・資質をいくらかは得ることができるという結果を得られた。学生数その他の要因により、今後も子どもとかかわる機会の提供には制限が出てくると思われる。その中でより学びを深めるためには、ただ子どもとかかわる機会を提供するだけでなく、その前後の指導のあり方を工夫し続けることが必要であると考えられる。

また、今回は講座の日程の都合上研究対象を21名としたが、サンプル数を増やすことにより詳細な分析が可能になると考えられる。今後、後期に2回目の講座を終えるグループ20名の分析も加え、より効果的な指導のあり方を考えていきたい。

註

- 1) 森木朋佳・伊瀬知裕子・鶴巻保子,「こども学フィールドワークⅡの授業実践報告 第8報」,『鹿児島純心女子短期大学紀要 第43号』,2013, 67-86
- 2) 川喜田次郎,「発想法 創造性開発のために」,中公新書,1967

